

衝冠斎有秀追善集 『追華罌粟』

——手銭記念館所蔵俳諧資料（五）——

伊藤 善隆

（湘北短期大学）

摘要

出雲国大社の手銭家に伝来する俳諧資料の中から、手銭家五代目当主である衝冠斎有秀の追善集『追華罌粟』（日々庵浦安編、椎之本花叔序、文政四年五月浦安跋）を翻刻紹介する。本書は、大社の俳壇で重要な役割を果たした有秀の追善集として重要なものである。また、句を寄せた俳人たちの顔ぶれを見ることで、大社俳人たちの交遊圏を知り得る資料としても貴重である。

キーワード：俳諧、有秀、浦安、大社、手銭記念館

はじめに

『追華罌粟』は衝冠斎有秀（明和八年～文政三年、五〇歳）の追善集である。有秀は、大社で町役の大年寄を勤めた手銭家の五代目当主として活躍した人物である。

本書は、浦安（宝暦一四年～弘化二年、八二歳）が記した跋文に「孝子のこゝろのせちなるにめで、おぼつかなくも校合し」とあることから、手銭家六代目当主である野塘庵有芳（寛政元年～天保一四年、

五五歳）の希望によって浦安が編集したものと考えることができる。

浦安は、手銭家とは親戚であった出雲大社の社家（千家家の代官役）広瀬家の人で、出雲俳壇に大きな足跡を残した広瀬百羅の息である。百羅の追善集である『あきのせみ』（文化二年跋）には、有秀が「門人」として序文（「枕言葉」）を寄せ、さらに百羅の肖像画も描くなど、両家の関係は深く、浦安と有秀は、当時の大社俳壇をリードする存在であったことが想像できるのである。

〈書誌〉

書型……半紙本一冊。袋綴じ。楮紙。

表紙……原表紙。薄縹色地に草花文様を艶出し。

縦二二・五cm×横一六・〇cm。

題簽……原題簽。中央無辺。「追華畧粟」。

序文……署名「椎のもと花叔「橘隠」」。

版式……無辺無界每半葉八行内外。なお、第二丁表・裏のみ、左

版(薄黄色地)で摺られている。

字高……一六・〇cm(序文「交はりししたしみ」を計測)。

跋文……署名「巳のとし皐月末の七日／素鷲の宮人／日々庵浦や

す「嘘楽」「真菅翁」。

刊記……「俳諧書林 京烏丸下立賣上ル 勝田善助」(裏表紙見返

し)。

丁数……全一五丁。

(白紙)

「(表紙)

交はりふかきを花鳥といひ、したしみあつきを月雪といはむ。よろづ
まめやかにして、訪へばおくり送ればむかへ、其情浅からざる白澤の
翁や、つねならぬいたつきに靈丹のしるしなく、五月雨のふりしきる
空に終の別れとなりて、闇の水鶏の扉をさへうしなひ侍りぬ。されば」
(一) 日頃このめることとして魂なくさめんにはしかじと、かれによせ是
を歎く風士の句々をあつめて追善の薙をひらくに、行水のながれと、
まらず、無常迅速の通れがたきを、花げしのもろきに比せし亡人の遺
詠あり。これをすぐに集名となさんはいかにといへば、一座こぞつてう
なづきあへり。

椎のもと花叔「橘隠」 「(ウ)

辞世 白澤園有秀

松の千とせもかぎりあれば

さくもちるも世は花げしの時津風

「(三)

四時之吟

むらさきの色に科かす山桜

ほと、ぎす終に蓐の料理喰

名月のほそみをほろり芒哉

ふねの雪橋をしづかに寐る夜かな

いさゝの浦人芒庵

「(ウ)

〈翻刻〉

翻刻にあたっては、概ね通行の字体を用いた。
句読点、濁点は適宜補い、改行も適宜改めた。
原本の各丁片面の終わりに当たるところに「」をつけ、() 内に
その丁数および表・裏(オ・ウ)を示した。
参考のため、原本の一部を図版で末尾に示した。

善華畧粟

「(表紙)

終焉之格詠

友垣有秀のうし、涼しき月をながめんと、よみの山路に思ひた
てるを、微雨晴間だになければとて、人々いきまきてとむれど
も、花げしの一句にあとをかくされしは、唯夢の世の夢なるべ
し。日頃断金の交はり浅からず、深く約したることも多かるに、
つれなく吾は捨られたり。嗚呼、かなしいかな

日々庵
浦安

蝶の夢五十年とは短夜也

扱もく明たり月の霜柱

花は名を残す木末の茂り哉

合歡の花心の夢も覚つらむ

空蟬のたぐひもあれどさりとは

有し世のま、や団扇の置所

一声もきかで明たり郭公

人ごとのおしむ螢の行衛かな

五月雨のふるや手向の閑伽の水

雨風をいとふかひなしけしの花

掃もおしちりても芥子の花のつや

帰る山の名残を啼よほと、ぎす

たのみたる月は入たり五月空

生者必滅の習ひ、驚くべきにあらざるも、家翁わづかに五十に

して、此皐月末の七日、北邙の露と消給ふ。嗚呼、いたづらに

多くの月日を送りつ、今や千古のわかれとなるに、無辺の愁

涙とゞめかねて

禁墟庵
有芳

思ふことみな五月雨で暮にけり

「(オ四)

衝冠齋有秀追善集『追善華畧』—手錢記念館所藏俳諧資料(五)—(伊藤善隆)

文音

悼手錢有秀君。々嘗刻_子石印以賜焉。方今為之花押也。一以喜
一以悲。殆不堪感旧之至、而所以賦一絶也。

杵築風流知属君 豈図生死永離群 幸因手沢存印石 還懶招魂押此文

横山直卿「(ウ四)

白澤主人みまかり給ふをいたみて

雨風の世事をはなれて釣鐘草

五月雨とりわきて我袖の上

六月もまたで去けりほと、ぎす

扱もく紅葉の桜枯にけり

衝冠齋主人をいたみて

花げしは只の露さへ目にかゝる

五月雨の別にしぐれの一しきり

雲に水に影もとゞめず夏の月

白澤主人は、稍公役に心をゆだねらるゝの暇も、なを古賢の

風流を慕ひて、花の陰に吟じ、月のゆふべをおしまれけるが、

今や公務を辞して、閑居の時を得たるといへども、病床の重き

にまつはれ、世を去給ふぞ是非なき。嗚呼、且夕の労を慰せず

して、こゝろざしはたされざる事を悔るのみ

零せぬ草々はなし五月空

雲に入月影おし、ほと、ぎす

芒庵のぬし、花げしの一句を残し、「(ウ五) はかなくなられしと

聞て

けしちるや哀れ常なき時津風

ヒラタ 喜得亭 春聲

松茂亭
露丸「(オ三)

里信

一止

田柳

安雄

扇風

呉竹

勸喜

泉里「(ウ三)

泉東

亀川

富三

チノミヤ 無心齋 一釣

素雲「(オ五)

龍池

ミトヤ 喜巳齋 維中

シンチ 觀清齋 奇盛

マツエ 八十七 露庭

マツエ 八十七 泉女

炷香も世にしる風のかほりかな

散際のすゞしや蓮の花筏

惜いかな世を花げしのちり急ぎ

月花に残るなみだや土用干

きくものは月とわれ也ほとゝぎす

夏草やこぼれし露の置心

わくらの葉の中にもみぢの落葉哉

折からや蟬もろともに泣しきる

佛は松のしづくや夏の月

白げしの立派に散てなをかなし

入相もつくづくかなしねぶの花

花げしのちりてかひなき垣根哉

さればこそ爰も曇りて花檮

紫陽華や姿かはるとおもへども

日ざかりに洞むも合歡の名残哉

恪めどもちり安き世や蓮の露

此翁は素鷺の里の柱にして、予もともに遊ぶ事、既に二十年の

けふに至り、此柱も空しく朽て、爰にもひとつ涙川ながれぬ

ともに啼鳥や五月のみだれ雲

おしめども風のほたるとなりにつ

折からやこれも血に啼ほとゝぎす

涼しさの月にわかれてなみだかな

星落て五月の闇をおしみける

聞やその日泪もともにさみだる、

山をかへてもふかへらぬよ蜀魂

、 春蛾

、 春鯉

、 春松

、 春濤

、 如春

、 如柳 「(オ六)

、 初人

、 守中

、 如石

、 鶴子

、 湖秋

、 江雨

、 蝶睡

、 松卜 「(ウ六)

、 喜仙

、 鳩飛

、 松蘿鹿

、 花叔

、 露光

、 東廬

、 兔月 「(オ七)

、 東宇

、 楽二

、 自省

、 自省

なき友の噂ばかりや夏の月

ほとゝぎす塚に来てなくは人ばかり

沢水の世を住かへて蓮の露

百合人もうつむく雨の夕哉

有秀雅伯、はからず黄泉の客となり給ふを聞て、共に袖をしぼりつ、一章を手向奉る

苔清水おしや命はむすばれず

有秀ぬし、遠く旅路に去給ふとき、て、こと葉さへなく

日ざかりに白蓮の雫落にけり

跡とへば白雲深し夏木立

峯とをく夏はかくれて散松葉

去しとや山のそなたの郭公

たぐりたる蘆はかひなしちる螢

橘の香もありぬべし土用干

、 逸中

、 うつみ

有秀の君、はかなく世をさり給ふとき、ておどろかれ、悼の歌

よみて奉る

露しぐれさそふあらしのはげしさに

なげきのかげは言の葉もなし

追善

夕去朝きたりて、けふははや大練忌を申ふとて

手折つ、はらひかねたり萩の露

夫の霊前に香花を捧げて

花げしのちるやうなく蝶とわれと

しほ

ハリマ 青山氏 雄女

「(ウ八)

ナガト 羅風

ワカサ 止観

、 琴峯

、 文鳥 「(オ八)

、 三起

、 逸中

、 うつみ

父君の喪にくらして

鹿とともになき明しけり笞の月
うつ蟬や芒の露のかひもなく

初月の忌にあたりける日、廟前に会頭して

おしまるゝ名のみ残りて夏の霜
汗なりと人にはいへど袖のぬれ

水無月の末、旅より帰りて此翁の終焉を驚く

よき華のちりあと高し芥子畑
ほとゝぎす一先過る西の空

風雅のちなみ深かりければ、みるものごとくに泪の霰とならざる

はなし

心から夏のゆふべも月かなし

虫干や泪にひたす筆のあと

雲霧に心のうつる清水哉

露の身はさえて螢の光哉

しほりてもかはかぬや袖と汗拭

初ての盆会をいたむ

思ひがけなくて茄子の駒迎

生残るあはれをなくか秋の蟬

一葉ちりて琴の音をたつ夕哉

病中もしらず末期もしらず

新仏念仏申も啞らしき

有秀風士の卒哭忌に

百草をけふ百日の手向かな

めぐる日のなみだにふるよ秋の雨

みつ

りゑ（十九）

宇休

十圍

素川

千瓢

「十九」

里信

呉竹

葵衛

央

露庭

奇盛

浦安「一〇」

雪桃

文蛇

文水

みな

香ひねる手さへおもたし袖の露

此秋も穂に出る庵の芒哉

おもかげもきえぬ机に秋の来ぬ

老となるとも共にみんと契りし月はありながら

物いへばうなづくほそり芒哉

思ひ出しし袖の露時雨

ちるもの、中にもけしの一重かな

久しく隣国に杖をやり、寒天に帰路を得て、白澤師の霊前にぬ

かづく

合掌の泪に袖の水柱かな

秀所 素号「一〇」

護山道法居士の大練忌なりと、有芳ぬしの招きに応じて、す、

き庵にあつまり、いけるが如き画像をかけ、香華を捧げ文台を

立るに、懐旧の泪、衣をひたしつゝ、つたなき一句を手向る。

我も世にすむかひなき心地こそすれ

露時雨が袂より染はじめ

日々庵 「一〇」

追善誹諧之連歌

咲もちるも世は花げしの時津風

空はかなしき夏の入相

海山に眼のゆく庵や作るらむ

同じ流れをわたる板橋

名月や雪にかならずよき処

今ぞ身にしむ源氏狭衣

樵ための妻木に露の時雨けり

喜朝

田柳「一〇」

安雄

浦安

露丸

つゆ

有芳

雪桃

露丸

浦安

有芳

雪桃

露丸

浦安

有芳

雪桃

露丸

浦安

有芳

喜朝「一〇」

戻りは八瀬へまはる巡礼

四五年の加減の違ふ老を泣

命がはりの飛車捨にゆく

月寒し岩の尖りを削るとて

登りの駄荷の凍ながら来る

兄弟が染手拭を一やうに

譲りの黒子大事がる也

隣同士理責に恋をする合点

井筒の草のもゆる明暮

笠とれば花より上の雲もなし

歌たてまつる佐保姫の宮

ものいへば答ふるやうに啼からす

ふねのたよりのさんざめく声

はたくと寐ぼくれし夜の洪団扇

天窓剃ふといふも何年

味酒の三輪の山本なつかしく

何のあらしにさはぐむら芦

沼太郎が田面の草を踏よごし

簫吹かゆる楼の月

秋の雲あすの軍をはかりかね

案山子の弓を貫ふしづかさ

世の中は杭に任せる捨小舟

棚の雪をかぶる落人

誰がためにかくまで茂る草の原

子をひく狐餅やとらせん

素川

田柳

一止

安雄

呉竹

葵衛

泉里

鳥水「(ウ三)

執筆

雄

信

柳

桃

朝

安

柳「(オ三)

丸

朝

柳

止

雄

丸

安

里「(ウ三)

竹

能因の杖の片われ拾ひけり

鳥羽の堤へ春のひろがる

亡骸にかほるさくらの句を吟じ

二むれ三むれ蝶の来る里

二川「(オ四)

安

水

衛

川

紙

跋

古人芒庵のうしは、つねに和学を好み、俳諧に富て、あまねく人の聞

しりたる正門の英士也。おしむべき善友也。生前のちなみをわすれず、

追悼の思ひをのべて亡魂をなぐさむるや、ひとへに風雅の実なるべし。

ひそかにこれを一卷となして、海晏霊場に納め、鳥のあとたえず、正

木のかつら長く」(オ五) 信を伝へむとの、孝子のこゝろのせちなるに

めで、おほつかなくも校合し、そのことはりをしるすにも、数行の

涙、硯の海にあふるものぞ。

巳のとし皐月末の七日

素鷲の宮人

日々庵浦やす「嘘楽」真菅翁

「(ウ一五)

俳諧書林 京鳥丸下立賣上ル勝田善助

「(裏表紙)

「(裏表紙)

「(裏表紙)

〈付記〉

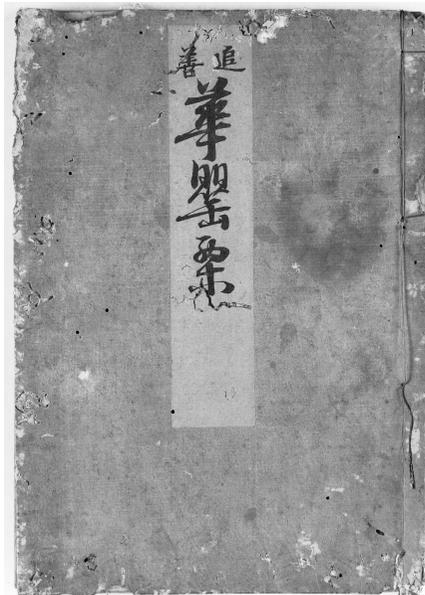
本稿をなすにあたり、手銭家の皆様には特段のお世話に預かりました。また、手銭記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の公開に関するプロジェクト」(二〇一三～二〇一五年度、代表・野本瑠美)、国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」(代表・大高洋司)、科学研究費補助金(基盤研究(C))「人を結びつける文化」としての俳諧研究」(研究課題番号二六三七〇二五九、代表・伊藤善隆)の研究成果の一部である。

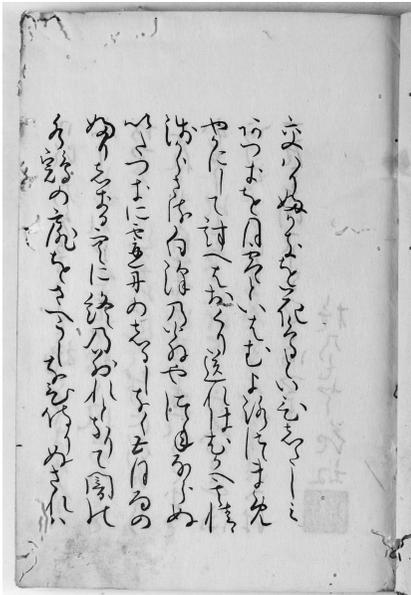
なお、本稿は、拙稿「季硯句集『松葉日記』—手銭記念館所蔵俳諧資料(一)—」(『山陰研究』第六号、二〇一三年二月)、同「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(一)—手銭記念館所蔵俳諧資料(二)—」(『湘北紀要』三五号、二〇一四年三月)、同「百羅追善集『あきのせみ』—手銭記念館所蔵俳諧資料(三)—」(『山陰研究』第七号、二〇一四年一二月)、同「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(二)—手銭記念館所蔵俳諧資料(四)—」(『湘北紀要』三六号、二〇一五年三月)に続く研究成果である。

〈参考図版〉

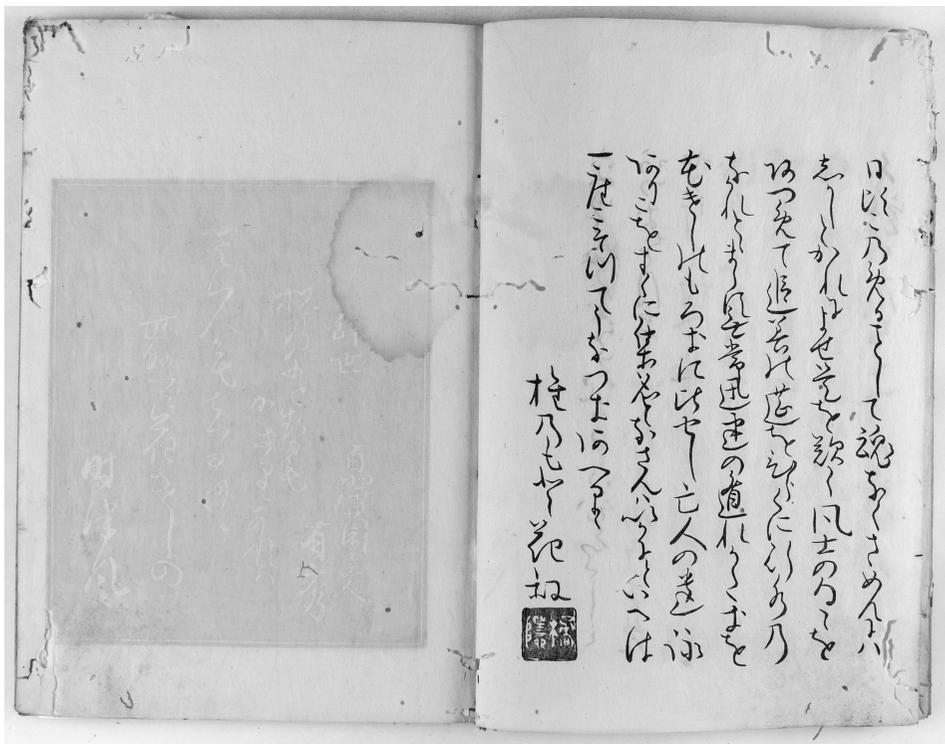
1. 表紙



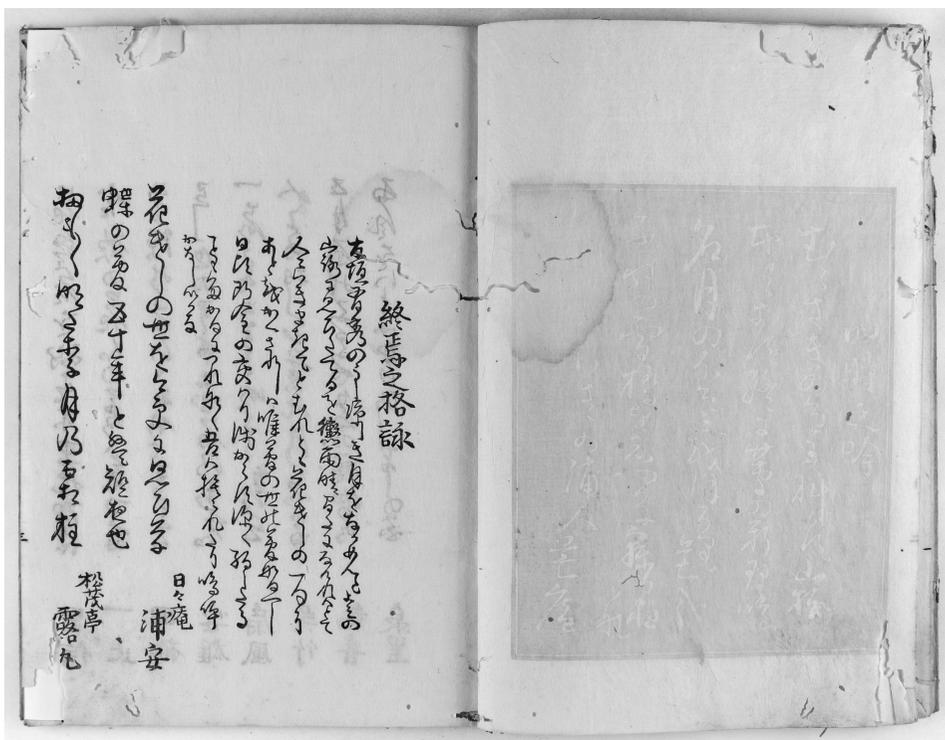
2. 序文巻頭(1オ)



3. 序文末尾・扉 (1ウ・2才)



4. 扉・本文巻頭 (2ウ・3才)



5. 本文(4ウ・5才)

悼手鏡有秀君と嘗刻于石印
 以賜焉予人爲之花押也一以喜
 一以悲殆不堪感奮之至而所以賦
 一絶也

村藝風流知屬君豈圖生先永
 離釋幸因手澤存印石還願招魂
 押此文

横山直脚

白海の世もさそわれん為禱を
 雨風の世もさそわれん為禱を
 五月雨わたりたまきと我神の上
 六月をわたりたまきと我神の上
 柳をりくみまふの柳枝よりり
 衛尉齋主人をたつて
 五月雨のあまのりくみまふの柳枝よりり

奇盛 露鹿 泉女 無忌齋 釣 志雲

6. 本文(11ウ・12才)

護山直佐治君の大徳をあらと有安
 舟の招きも舟もすささるよありあり
 文をよとさるも懐懐の泪を流りしうく
 つらきさるもさるもさるもさるもさるも
 さるもさるもさるもさるもさるも

西海雨わたりたまきと我神の上
 日三庵

追善誹諧之連歌

海山望のわたりたまきと我神の上
 日三庵

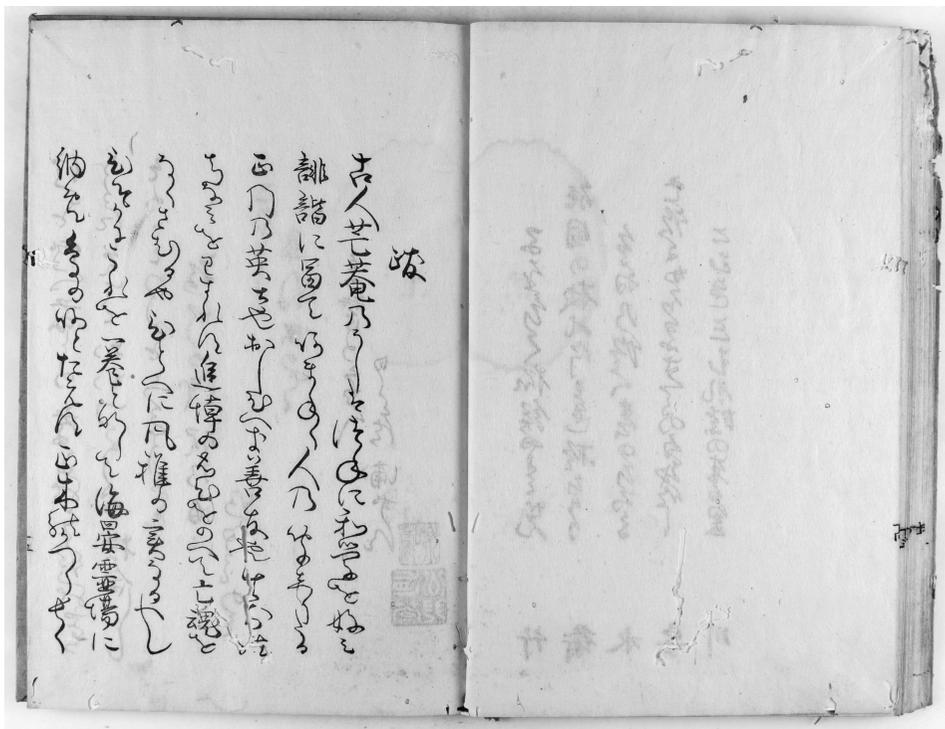
五月雨わたりたまきと我神の上
 露九

六月をわたりたまきと我神の上
 雪柳

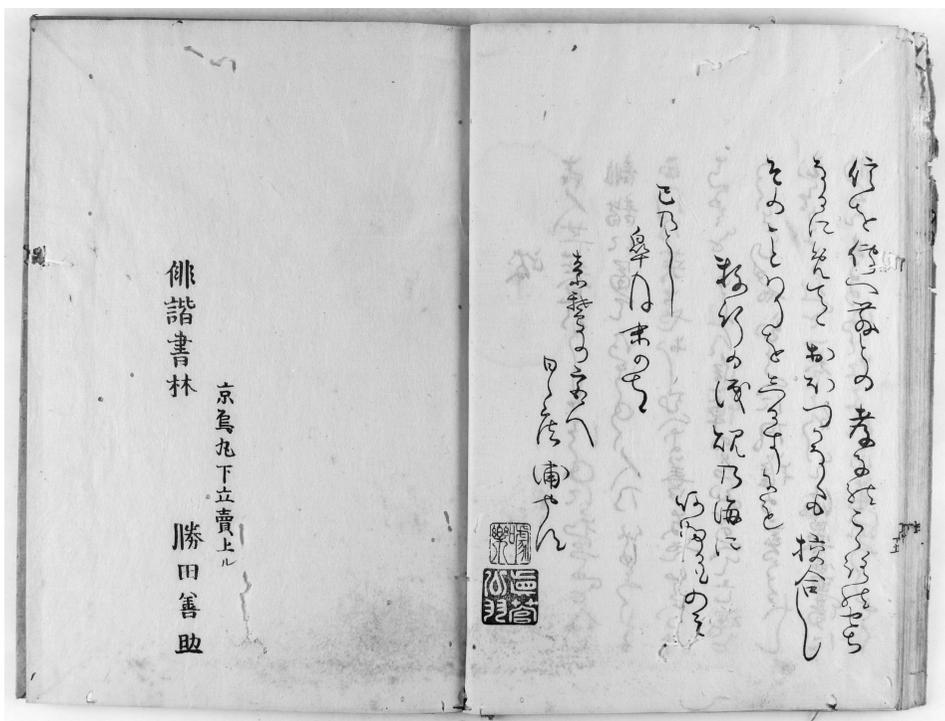
柳をりくみまふの柳枝よりり
 喜朝

衝冠齋有秀追善集『善華器粟』—手錢記念館所藏俳諧資料(五)—(伊藤善隆)

7. 跋冒頭(14ウ・15才)



8. 跋末尾(15ウ・裏表紙見返)



The memorial collection tribute to Arihide“Tsuizen Hanagesi” : reprint and introduction —A study of Haikai literature in Tezen Family Archives (5)—

Yoshitaka Ito

(Shohoku College Department of Business Administration and Communication)

[Abstract]

“Tsuizen Hanagesi” owned by Tezen Museum is a memorial collection tribute to Arihide. Arihide was one of the most important haikai poets in Taisha area. In Taisha, haikai poets had inherited the teaching of Kyorai, which was introduced by Byakura.

Key words : Haikai, Arihide, Urayasu, Taisya, Tezen Museum